孤独な愛され女王蜂　６

孤独な愛され女王蜂　6

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19479146

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, テル霊

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。今回は本番はテル霊です。♡喘ぎあり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

孤独な愛され女王蜂　6

【？？？本部】

「ヨシフ、ターゲット『女王蜂』（クイーンビー）の動向はどうだ？」
薄暗い部屋で、ノートパソコンの光だけがボンヤリと２つの人影を壁に落としている。
「前データではかなり怪しかったのですが、潜入調査してみると、むしろオメガ擁護思想者のようでして、犯人の可能性は低いかと」
「まだ短期間だ。演じている可能性もある。『オメガ擁護派連続襲撃事件』の犯人として真っ先に疑われたのが、能力者のアルファをグループで支配下においている『女王蜂』（クイーンビー）だからな。１番の容疑者を野放しにする訳にはいかん……が、有能な君の意見も捨ておけない。念には念を、他の容疑者の内定も別の者に進めさせよう」
オメガ擁護派連続襲撃事件。オメガのシェルター拡充やオメガ雇用機会均等法の推進者など、オメガ擁護に動いている政治家が、相次いで何者かに襲撃されている事件だ。警官の警護を突破されての襲撃なので、警察の面目丸潰れな、警察でも止められなかった強力なアルファによる暴力事件だ。その情報は世情不安に陥らせかねない。よって戒厳令がしかれていて、今のところは一般人には公表されていない。
「公共の安全を守るのが我ら公安の存在意義だ。何としても世情に反映される前に犯人を叩き潰さなければならない」
「……心得ております」
「『女王蜂』（クイーンビー）に怪しい動きはないのか？」
「……複数のアルファとの密会は繰り返しておりますが、その……」
ヨシフは盗聴機の音声を再生する。
薄暗い部屋に響き渡る霊幻の喘ぎ声に、律の言葉責めの声。

「……データはほぼそれです。ヤッてるか、寝てるかのどちらかです。長官も確認されますか？」
「いやいい……不安になってきたな、我々はただのビッチのケツを大掛かりに追い回してるだけなんじゃないだろうな？」
「……」
ヨシフはそれを否定できない。
「個人の感想を申し上げると、『これまでの潜入捜査でも見たことないレベルのドビッチオメガ』が霊幻新隆ですかね……」
「……いやまだ内定の済んでいないわずかな情報に惑わされてはダメだ。我々が霊幻新隆から手を引くのは、『女王蜂』（クイーンビー）がただのビッチだと確定した時だけだ。……周りのアルファに思想的偏りは無いか？」
「敢えて言えば、職場に関してはオメガへの差別意識が薄い連中が集まっていますね」
「……うーむ、でないとオメガの下では働けないか……」
「長期間交際している相手は、」
「……ちょっと待て職場以外でもアルファを誑かしてるのか！？」
「……そうです。続けても？」
「あ、ああ、すまない……オメガとして規格外すぎて……良く死人が出ないな」
「そういう相手を選んでいる、と言っていました。実際『彼氏』と呼んでいる交際相手は、性的に奔放な、束縛の弱いアルファです」
「いやそれでもだな、アルファの本能として、特定のオメガと身体を重ねれば重ねるほど束縛欲が出てくるだろう」
「だからそういう行動が出てきたら別れて、『彼氏』は入れ替えているそうです」
「なんともはや……『女王蜂』（クイーンビー）はアルファフェロモンへの依存性は無いのか？」
「そういった依存性は常に複数のアルファフェロモンを浴びていることで、薄まるようです。『女王蜂』（クイーンビー）には番が存在しますが、番への依存性も、」
「ちょっと待て番がいるのに他のアルファと寝てるのか！？！？！？！？」

「……どうやら『女王蜂』（クイーンビー）は特殊体質らしいです。番への依存性も無いようですし、他のアルファを誘うフェロモンを出し続けています。それと運命の番がいますが、アルファ側は強烈に誘惑されますが、『女王蜂』（クイーンビー）自身は『いい匂い』程度にしか感じないみたいです」
「運命の番までそうなのか……誰なんだ？影山茂夫か？」
「俺です」
沈黙が２人の間に落ちる。
「え……それ大丈夫なのか……？」
「プロなんで」
「と言うことは、『女王蜂』（クイーンビー）の番ってお前のことだったの！？」
「いえ違います。影山茂夫です。事故で無理矢理噛まれたらしくて」
「なんかドロドロしてんな！？このまま内定続けて大丈夫かお前」
「大丈夫です。俺の担当から変更しないでください。……これ以上他のアルファが『女王蜂』（クイーンビー）に近づく方が俺にはつらいです」
「ヨシフお前……」
「恋愛感情じゃありません。本能の問題です」
長官は何か言いかけて、黙る。
「……ほんとうにか？」
「はい」
「ならいい。オメガからのハニートラップへの耐性はお前が１番高い。他の調査員では『女王蜂』（クイーンビー）に膝をつく可能性が少なく無いからな」
「そうですね」
「引き続き調査を頼むぞ、ヨシフ」
「はい」
ノートパソコンに映る霊幻の映像とデータが、ブツンと消去された。

※※※※※

出張除霊を終えて、事務所に荷物を置いて一息つく。
「……お疲れ様です。所長自らが同行しないといけない案件だったんですか？」
お茶を淹れてくれながらヨシフが怪訝そうに聞いてくる。
「ん？ああ、依頼人がベータだったからな。アルファだけで行かせると、威圧感でちゃんと悩み事を話してくれないことがあるんだよ。だから、な」
ん、美味しいお茶だな。
「ヨシフさん、お茶淹れるの上手くなったな」
「おかげさまで」
オメガ差別があれば、アルファ差別もある。今日同行してくれたテルくんはかなり物腰柔らかな好青年だが、それでも『アルファ』だというだけで、犯罪者扱いしてくる人もいるのだ。
実際襲われたことがあるオメガの身である俺としては、なんとも言えない。
アルファは知能が高く肉体的に優秀だ。それゆえに、道を踏み外すと怖い。
アルファは紳士。アルファは誇り高い。色んなアルファがそんなイメージを必死につけようとしても、１人アルファの凶悪犯が出てしまえば、そう言った社会的信用はガタ落ちだ。
もちろん俺の相談所を手伝ってくれているアルファは犯罪を起こすようなやつらじゃない。それは俺が保証する。
だが、外から見れば別だ。今日の依頼人も、オメガの俺の顔を見てホッとしていた。
「……『アルファを見たら犯罪者と思え』、ですか」
「おいおい過激なことを言うなよ。この事務所の大半の子達はアルファなんだぞ」
アルファを見たら犯罪者と思え。オメガ性だと判明したらまず耳にする言葉だ。
「実際に犯罪の被害者になりやすいのは弱者のオメガで、加害者になりやすいのはアルファだ。間違った心得ではないでしょう」
「それはあくまでこれまでの統計の結果だ。俺はこれからアルファ

がどうしていくのか、それの方が大事だと思ってる」
大事なモブが、芹沢が、テルくんが。
「俺はアルファの人間性を信じてる。……モブと出会ってからは、特にそう思うよ」
複雑そうな顔をヨシフさんはしている。
いやほんと。
相談所員に簡単にヤらせたのは間違いだったかなー、と思ってんだからさ。
ヤッたら興味が無くなるかなあと思ったんだよ。まさかそのままなんちゃってセフレ状態になるとは……。
「……ここは、オメガのシェルターってだけじゃないんですね。アルファのシェルターでもあるんだ」
……？何言ってるんだろう、ヨシフさん。
「……そうですね。傷付いたアルファが集まってる場でもありますね」
テルくんが言う。
「全部霊幻さんの人徳ですよ」
フェロモンの間違いじゃねぇの……。
「あ、俺、今日も宿探しするから定時で上がるわな。芹沢施錠頼むわ」
「……あれ？律くんの所に泊まってるんじゃなかったですっけ」
ん？テルくんに話したっけ？ま、いいや。
「いや、律くんには……迷惑かけちゃうから……」
「？なんだか良く分からないですけど、それなら僕のマンション来ます？」
あー、そう言えばテルくんも一人暮らしだったか。
「僕たまにセフレ連れ込むんで、その時外に出ててくれるなら、一緒に住みたいですね、霊幻さんと」
！！
えっテルくんてそっちのタイプだったの！？
「マジで？えっ助かるわ」
芹沢が何か言いかけて黙る。いやお前んちにはガチ恋されそうで怖いから行かねえからな？

テルくんモテるし、セフレ彼女もいるならちょうどいい。しばらく世話になろうかな。
……とはいえ、いつまでも子供の部屋に世話になってるのも悪い。引き続き宿探しは続けないとな……。
「じゃあ僕、スーパーに寄って晩御飯の材料買ってから、先に帰ってますね。何か食べたいものあります？」
「あー、スパゲッティで何か食いたいかな。俺も野菜炒め作るわ。ついでに適当な野菜買っといて」
材料費を渡しながらテルくんに言う。
「今日はセフレは大丈夫なのか？」
「セフレ？」
きょとん、とテルくんは俺の顔を見る。
「あ、ああ！セフレですね、そう、セフレ、今日は呼んでないので大丈夫です」
「そ。ならいいけど」
俺は今日の分のテルくんの給料の計算を始めた。
「また仕事終わりに迎えに来ますね」
「ん、悪いな」
テルくんはやたら嬉しそうだ。何かいいことあったのかな。
「いいなぁ」
芹沢のつぶやきは聞こえなかったことにしておく。

※

迎えにきたテルくんと何故か手を繋ぎながら、オートロックのマンションにやってきた。
「すみません、散らかってて」
生活感のある部屋。
「いやいい！全然いい！」
それにしても広いな。
「家賃折半できるかな……」
「え？宿代払ってくれたらそれでいいですよ」
上着を引っ掛けたままのソファーに押し倒される。

「いや足りてねぇだろ。こんなオッサンオメガじゃ精々割引きってところだ」
めっちゃくちゃ美形でモブに匹敵するアルファに俺は釣り合わない。それこそテルくんがセフレにしてるだろう、すんげえ美人の若いオメガ女性とかじゃないと。
「僕も稼ぎがあるんで、本当に家賃とか要らないですよ」
「そういう訳にはいかねぇよ。大人としてのケジメだ」
テルくんは楽しそうにずっと俺の頬を撫でている。
「なら、宿代で割り引いて、月３万でいいです」
「ん、助かるわ」
テルくんと口付ける。口移しで流し込まれる濃いアルファフェロモンにくらくらした。
「……っ、は……っ」
息継ぎを許さないテルくんが、また深く口付けてくる。
ピリピリとした快感をもたらす分厚くてぬるい舌が、フェロモンがたっぷり溶けた唾液を刷り込むように執拗にベロの下に潜り込んで抉ってくる。
「ん……ん……」
ヤバい。テルくんのキス気持ちいい。このままだと流される。
俺はぐいっとテルくんの胸を押して、強制的にキスを中断した。
「……ゴム準備して。俺、誘発剤飲むから」
「分かりました。コンドーム……は無いんで、霊幻さんの使わせてください」
「ん……」
あー、アルファフェロモンであたまクラクラする。
俺はコンドームの箱を取り出しながら、誘発剤をペットボトルのお茶で流し込む。
こんだけアルファフェロモンを摂取してたら、キまりすぎるかもな……。
「いつか誘発剤飲んで無いあなたも抱かせてくださいね」
「え、嫌だよ」
それただの俺だぞ。ヒート起こしてなきゃオメガでもないんだからさぁ。

「あ」
ぐいっと引っ張られて、テルくんの胸の中に収まる。あー、抱きしめられるとホッとすんなー。テルくんも大人になったよなぁ……。
「霊幻さん、顔上げて」
「ん」
また口付けられる。テルくんキス好きだなあ。
「んぅ……んあっ」
口の端から唾液が垂れる。
手早くテルくんがスーツを脱がせてきた。
俺もヒートの前兆で震える指で、テルくんのシャツを落とし、ジーパンのベルトに手をかける。
「あんまりその辺触らないでください。暴発しちゃう」
はは、童貞みたいなこと言うなよ。
俺は一応気をつけながらテルくんのズボンを脱がせた。
テントを張ってたボクサーパンツを脱がせたら、ほんとにぶるんって音がしそうなほどのご神体が鎮座してた。
「ん……」
性欲強いのかな、テルくん……俺寝かせて貰えるだろうか。
「ん♡ん♡んあっ♡」
あっ♡ヒートきたあっ♡ソファーに倒れて、テルくんを引っ張りこんじゃうぅっ♡
欲しい……っ♡♡♡
「ソックスガーター、エロいですね……靴下履いたままでいいですよね」
べつにっ♡べつにいいっ♡
「乳首可愛いな。舐めてもいいですか？」
だめぇ……っ♡
「舐めますね」
んあああぁあっ♡ひどっ♡
「あぁっ♡やだぁっ♡噛まないでぇっ♡」
もっと噛んでぇっ♡コリコリ気持ちいいれすぅっ♡♡♡
「れいれんさん、きもひいいれすか？」
そこでっ♡しゃべらないでぇっ♡

「すごい、本当に濡れるんだ……」
指でアナルくちゅくちゅやめてぇっ♡
「どんな味なんだろ……」
ああああああっ♡ベロやだぁっ♡
「……おいしい。蜂蜜みたいだ。花みたいな匂いがする」
は、恥ずかしい……っ♡
！！
ずるずるクチュクチュやめてぇっ♡
「あっあんっ！♡やめてぇっ♡」
「……そろそろいいかな」
もたもたと、ゴムつけてるっ♡不器用可愛いっ♡
「……えっと、ここでいいのかな」
「あ、ってるぅ……っ♡」
おっきいのがっ♡ずずずって入ってきて……っ♡
「……っ、すみません！」
びゅるるって♡出たあ……っ♡
「すみません、すぐゴム取り替えるので」
「あせらなくてっ♡いいからっ♡」
テルくん真っ赤♡可愛いっ♡
「こんなに気持ちいいとは思わなかったな……」
嬉しいことっ♡言ってくれるっ♡♡
「挿れますね……っ」
あっ♡
奥までズドンってきたぁ……っ♡
「あぁああっ♡イくぅっ♡♡♡」
トコロテンっ♡♡♡したぁっ♡♡♡
「イっちゃうっ♡♡♡このチンポ好きぃっ♡♡♡挿れてるだけでヤバいっ♡♡♡」
あーはは♡あはっ♡きもちいいっ♡♡
「僕のことは嫌いですか？」
「まさかっ♡好きだよっ♡♡テルくん大好きぃっ♡♡あ、あ、あ、イくぅ……っ♡」
全身ゾクゾクしてヤバいっ♡♡

「僕も霊幻さんのこと大好きです。愛してる」
「おれっ、おれもぉっ♡テルくん愛してるぅっ♡♡♡」
ああああああっ♡♡♡好きぃっ……♡♡♡
「あっ♡あっ♡もっとドチュドチュしてっ♡きもちいいっ♡きもちいいっ♡♡♡」
「……っ、僕ももう一回イきます……っ！」
「きてぇっ♡♡♡」
あぁああァアアアッ♡♡♡
熱いのきもちよくてっ♡♡♡イくぅううぅッ♡♡♡

「……やっと手に入れた。影山くんたちがずっと羨ましかった。……ふふ、ずーっと一緒に暮らしましょうね、霊幻さん」

あんっ♡なんでテルくん、俺の保険証、金庫にしまってるのぉ……っ？♡

続